

## 校標について

### 「右文尚武」

この校標が本校創立10周年を期に制定された校歌（作詞：藤原正）の一節によることは言うまでもありません。本校生徒のあるべき姿として掲げられ、本校教育の指標とされてきましたが、いつ正式に「校標」となったのかについては、「八十年史」「百年史」には明確な記述が見つかりません。この言葉は司馬遼太郎氏の著作にも登場しており、藤原先生のオリジナルではないようです。『街道をゆく36』（朝日文庫）の「於玉ヶ池」の章に、いわゆる「神田於玉ヶ池」に千葉周作が玄武館を開いて北辰一刀流の剣術を伝授し、その西隣に東條一堂が瑤池塾を開いて儒学と詩文を伝えた場所があり、それらの跡地にある小学校の校庭に「右文尚武」の文字を刻んだ石碑がある、という内容の記述があります。「文」の瑤池塾と「武」の玄武館が隣り合っているこの場所で当時の若者達は文武の両方を学んでいたのでしょう。『文ヲ右ビ、武ヲ尚ブ、ということである。』という一節を読み、改めてこの言葉は「文武両道」を意味していることを実感しました。この石碑の写真はネットで検索すれば容易に見ることができます。

### 「質実剛健」

この言葉が校標になったいきさつについては、「八十年史」「百年史」に次のように記載されています。

「初めての試みであった秋田・本荘間駅伝競走は、本中生の意気と力を十二分に発揮して成功裡に終わった。生徒たちの間に、なにか自信と誇りに似た雰囲気が醸しだされていたとき、その状況をふまえて、

「大正十五年一月十四日『質実剛健』ヲ以テ本校訓育ノ方針トスル旨、校長ノ講堂訓話アリ」（「本荘中学校沿革史年表」）

ここに「質実剛健」の四文字が、校歌にうたわれている「右文尚武」と共に、本校生徒のあるべき姿、本校訓育の目標、指標すなわち校標とされたのである。」

大正十三年に、明治天皇の誕生日である十一月三日が「体育デー」に制定されました。第2回体育デーにあたる大正十四年十一月三日に開催されたのが、上記の文中に出てくる「秋田・本荘間駅伝競走」です。県庁前から校門までを第1区（秋田－新屋）、第2区（新屋－下浜）、第3区（下浜－道川）、第4区（道川－松ヶ崎）、第5区（松ヶ崎－本荘）の5つの区間に分け、全校が4つのチームに分かれて競ったこの大会は、当時の本県においては前例の無いものであったとのこと。前年に全線開通したばかりの羽越線で当日朝に秋田まで移動し、7時35分にレースはスタート。1位のチームが3時間21秒、最下位のチームがわずか6分遅れの3時間6分40秒というタイムからも、すべての走者が力を出し切った激戦であったことが伺えます。

この時期「質実剛健」を校訓などとして採用した学校はかなりの数を占めており、当時の社会情勢が大きく関係しています。「体育デー」が制定された背景と併せて、「八十年史」「百年史」には詳細に記載されています。

## 「玲瓏同氣」

現在本校の中庭にある「玲瓏同氣の碑」は本校創立五十周年を記念して建設されました。この碑の由来について当時の同窓会長である須藤直吉氏が学校新聞「玲瓏」第27号（昭和27年）に書かれた文章が「八十年史」「百年史」に掲載されており、その中に次の一節があります。

「この『玲瓏同氣』の語句こそは、かつて余輩が母校に奉職中設置した同窓記念室に掲額を請うた節、在職三十年薫陶にあたられた恩師小野純治先生から与えられたものであることは知る人ぞ知ると思っている。」

小野純治（おの じゅんじ）先生は、明治41年（1908年）6月から昭和14年（1939年）3月に退職するまで約30年にわたって本校に在職されました。ご専門は地歴で、郷土史研究の第一人者であったということです。小野先生のお人柄については、「本中校報第83号」（昭和15年）の「小野先生の横顔」という文章が「八十年史」「百年史」に掲載されております。

「何事にもものやはらかではあるが而も朴訥、争はないが而も迎合はしない。好々爺然としてゐるが而も凜烈たる気象がある。今日色々な意味で用ひられてゐる覇気とか気魄とかいったものはギラギラと表面に現れない。（中略）深く蔵して控え目に出されるといふ、まことに奥ゆかしい御人格で強い自信や固い信念がなければなかなか到り得ない境地であります。それでは教室では何も怒らなかつたかといふにそれはやはり怒る。然し冷たい怒り方はしない。怒るために怒るのではない、怒るといふよりもむしろ口説くといつた方が当たるかもしれない。だから怒られる方でも可成りゆっくりした気分で素直に怒られるし別に反感も起らない。その怒った効果は即刻表れないにしても長い月日の間にはすっかり感化されてしまうのが常でありました。」

小野先生が在職中の昭和10年（1935年）に、当時の校舎の中に本荘高校の歴史や卒業生の活躍を紹介する資料を陳列する「卒業生記念室」が設けられ、その部屋の壁に小野先生が書かれた「玲瓏同氣」の書が貼られました。

「この部屋の入口には、前年廃止になった寄宿舎鶴鳴寮の看板が掲げられ、室内の壁面には、小野純治書の『玲瓏同氣』の文字が貼られた。それは在校生卒業生が一体となって母校の発展を期すると同時に、在校生が卒業生を目標に、またさらにそれを乗り越えて行くことを念ずるといふ小野純治の造語であった。」（「本荘高校八十年史」）

現在「玲瓏同氣」は「金属や玉などが美しい冴えた音を奏でるように、優れた者同士が切磋琢磨して共に人格を高めあうこと」というお互いに切磋琢磨し合う状況を表すものとしていますが、小野先生ご自身がこの言葉に込めていた願いも、是非引き継いでいきたいものです。

生徒達がいかに小野先生の人徳を慕っていたかを示すエピソードとして、小野先生が退職されたときに、同窓会が感謝の気持ちとして家を一軒贈呈した、という逸話が残っております。退職されてから2ヶ月後の昭和14年5月の同窓会理事会において、小野先生に対する謝恩事業の案が議題として登場し、昭和15年12月27日に「謝恩の家」贈呈式が挙行されました。小野先生はこの研究室付きの家を「玲瓏館」と命名されましたが、残念なことに、この新住宅で悠々自適の生活をおくることもかなわず、僅か数ヶ月後の昭和16年2月3日に病気で亡くなられたとのことでした。

（文責：校長 熊澤耕生）